

一月十八日の急行櫻で上京し十九日の日曜禮拜は富士見町教會で守り三好牧師の神の選びと題する説教をきき翌二十日は松山常次郎・沖野岩三郎等を訪問し二十三日の急行富士で歸町したが頗る元氣で、翌二十四日の正午山下彬磨・村田幸一郎・檜山嘉藏・メレル・満喜子と共に八幡町役場に行きメレルの一柳家入家の證人となつて、これまでのウキリアム・メレル・ヴォーリスを一柳米來留と改めたのである。米來留とは米國人來朝して骨を留むといふ意味である。ラフカデオ・ハアンが小泉八雲となつて日本を廣く世界に紹介したやうに、一柳米來留も日本主義を汎く世界人に説くつもりである。ヘンリイ八世時代の國務大臣 Sir Simon D. Armonfort といふ、爵位をもつた政治家の子孫と、清和源氏河野通有の後流播州小野城主一柳土佐守の遠孫一柳満喜子とが、八幡町慈恩寺町に新しく日本人としての一家を打立てたのである。かくて昭和十六年一月二十四日を以つて近江兄弟社は新しく一柳米來留を迎へ入れたのである。

一月二十五日の朝悦藏は一柳米來留と共に縣廳に出頭縣知事以下の職員に挨拶をして歸つたが、同夜大阪放送局では此の事を報道し、大阪朝日新聞・大阪毎日新聞の夕刊にも麗麗しき記事が掲載せられたのであつた。

月二十六日の午後二時八幡教會で新體制總會を開いた。八幡教會の現在會員は男二百八、女二百四十一 合計四百五十人の會員と日曜學校生徒三百五十二人であり、その出張傳道所は米原・木ノ

本・能登川・愛知川・安土・水口・堅田・武佐・仁保・野田・今津・深清水・新庄・近江療養院・高宮・下豊浦・信樂・豊田・北の庄の十九箇所である。午後六時までかかつて其の新體制役員を決定したのである。

二月一日近江兄弟社創立三十六年の祝賀會を開いて二十五年勲績者を表彰した。被表彰者は瀧川健次・西澤正治・浪川岩次郎の三名であつた。

瀧川健次は大正二年六月九日の入社で滿二十七年八箇月の勤績である。彼は少年の頃馬場の鐵道青年會日曜學校に出席して藤原鐵長から英語を習つた事が縁となり大正二年に十六歳で近江基督教傳道團の一員となり、村田幸一郎の部下にあつて建築部で働いたのである。彼は繪畫が好きであり悦藏と共にコルネットを吹いた。八幡教會に最初の合唱隊が出来た時、田中金造夫人はソプラノ、吉田きよのはアルト、悦藏はテナアで彼はバスだつたのである。

西澤正治は大正三年九月の入團で滿二十六年五箇月の勤績である。彼は滋賀縣愛知郡八木庄村の産で巡航船に乗り機關士の免狀をもつてゐて八幡町會議員名村甚兵衛の經營する長命寺通ひの巡航船の機關士となつてゐたのであるが、ふとした事から悦藏とウォータアハウスを知り、ガリラヤ丸の機關士にならないかといふ勧めを受け、悦藏の宅で三箇月間團體生活見習の約束で假入團の上、ガリラヤ丸を操縦して琵琶湖上に爆音を響かせる事一年半にして福音の意義がわかり受洗したのであつた。

浪川岩次郎は幼年の頃水口教會の日曜學校に通ひ、そこでメレルの話を知ることがある。後に膳所中學校に入り馬場の鐵道青年會でウオーターハウスの聖書講義をきいて幼時を憶ひ出し基督教に導き入れられたのである。彼は英語に堪能で膳所中學校を一番の成績で卒業し東京の高等商業學校へ無試験入學の推挙を得てゐたのであるが、不幸にして盲腸炎を煩ひ上京不可能となつて草津の自宅で療養中メレルから近江基督教傳道團へ入團を勧められた。叔父の馬場嘉治郎は宗教團體に入つては金儲けができないと言つて反對したが、彼は遂に決心して大正四年四月八日に月給十圓で入團の約束をなし、同月十三日に團員の一人となつたのである。時に彼は十九歳であつた。英語に得意な彼の打つたイブライタアには殆ど一字の誤がないので非常にメレルに喜ばれた。後に彼は輕井澤で開かれたガンドレッドの英語速記術講習生となつて、全生徒二十人中の唯一人の日本人として講習を受けたが、卒業の際九十八點の採點で第一番として講習證書を授けられたのであつた。彼はその後永い間メレルの名秘書として、又、その優れた語學力を用ひて産業部の輸出入部主任として働きたりしたが、現在は兄弟社幹部の一人として活躍してゐる。

二月八日正午から村田幸一郎・佐藤安太郎・西村關一・一柳米來留・悅藏等が主人役となつて滋賀縣廳の職員達三十五名を琵琶湖ホテルに招待して、一柳米來留家設立の祝賀記念會を開いた。

二月十九日、近江療養院長栗本清次が豫て大阪帝國大學醫學部に提出中であつた、彼の博士論文横

隔膜神經捻除術の肺臓に及ぼす影響に就いての實驗的研究が無事通過したとの知らせがあつた。

十七年前に基督教信者の醫師としての彼を尋ねて、わざわざ福島まで出かけて行つて招聘して來た甲斐があつたと彼は喜んだことであらう。

此の頃は將基をを好んでさしたが、二月二十二日の夜、彼の發起で近江兄弟社圖書館の閱覽室で大阪毎日新聞記者樋口金信の講演會を聞いたところ來會者五十餘人であつた。

二月二十七日、近藤滋賀縣知事の來訪があつて近江療養院に案内した。此の夜加藤一夫の座談會を聞いた。

三月二十一日近江兄弟社女學校第四回卒業式を舉行し、二十八日には伊勢の皇大神宮に參拜した。

四月十日の大阪朝日新聞に去る七日栗本清次の醫學博士になつたことを報道してあるのを見て喜んだ。

此の頃は時々喉頭の痛みを感じ、仕事のあとで疲勞を感じる事が多いのでよく早寝をするやうになつた。

四月十二日の午前北ノ庄の納骨堂で慰靈祭をすまして歸つてみると、滋賀縣圖書館協會の會長囑託の辭令が來てゐた。まだ滋賀縣には縣立圖書館が設立されてゐないのである。で、十九日の急行車でのぶを伴れて上京、上野の帝國圖書館・東京帝國大學圖書館を見學して始めて宮武外骨に會ひ、田

無村に左近義弼を訪問して輕井澤に行き青林山莊に一泊して小諸城趾を見て二十五日午後五時に歸宅したが少し風邪氣味で左程の疲勞は見えなかつた。

四月二十七日には滋賀縣下基督教徒大會を八幡教會に開いて、我等祈るべし。と、題して説教した。

五月一日 たかをつれて上京、風邪氣味を押して國際協會や赤十字社特別社員會に出席したり、日本圖書館協會會長松平頼壽・沖野岩三郎を訪問した上、湯島聖堂・神田明神・憲法記念會館などを視た。

五月十日には近江兄弟社圖書館が日本圖書館協會の支部となり、悅藏は近江兄弟社圖書館長・日本圖書館協會滋賀縣支部長・滋賀縣圖書館聯盟長となつたので、支部發會式を舉行して松平頼壽の講演があり、滋賀縣知事・文部省社會教育局長・八幡町長の祝辭があつた。

五月二十五日希夫はいよいよ幹部候補生となつた通知が來た。備後正廣の名刀を腰にする時が近づいて來たのである。

五月二十八日に北越へ社員厚生旅行をなし其の夜は山中温泉で谷間の水音を聞きつつ一場の感話をなし、翌二十九日には三國・東尋坊を見、三十日には福井市の電燈會社を訪問した。此の一行には大橋五男もゐる悦藏は彼と共に車中談を交へながら八幡町に歸つたが、翌日は寢床に横はつたまま終日外出しなかつた。

六月七日の午後近江兄弟社圖書館で太湖の會をして約二十人の同人が集つた。太湖は滋賀の郷土研究誌である。十五年前に近松文三郎の發起で出來た滋賀縣の郷土研究誌として發行されたもので悦藏も其の同人だつたのである。近松文三郎は東京一つ橋の高等商業學校の出身で其姉は大阪浪花教會の牧師であつた杉田潮の妻であるといふやうな關係で悦藏とは極めて懇意であつた。此の太湖といふ雜誌は昭和十六年十一月まで發行を續けたもので、悦藏の家と近江兄弟社圖書館とは各號を残りなく保存してゐるのである。

この頃近江兄弟社の社員の娛樂は釣と將棊との二つに分れ、釣部は社長の村田幸一郎を大將として浪川岩次郎・小川祐三・檜山嘉藏等がみな小太公望となり、將棊では悦藏が東の大關、池田延男が西の大關、東の關脇が森三郎、西の關脇が鎌田漢三、東の小結が荒尾眞二、西の小結が豊田清次、東の前頭筆頭が佐藤久治、西の前頭筆頭が栗本清次であつた。悦藏は全日本將棊大成會から十級棋士の免狀を與へられ六月十四日には元のゲストハウス今の樂朋館で八段木見金次郎一行の棋會があつてそれに出席したのであつた。將棊に夢中になることが病氣を進めるといふ心配もあつたが、果して翌十五日は一日中寢床を離れ得なかつた。けれども十七日には神戸貿易俱樂部で某二段の指揮の下に大村甚三郎と雌雄を決する事數時間にして大勝を得たりと日に記してある。越えて三日の後二十日に京都に行き同志社大學の人人と瓢亭に會合し、夜は岡崎鶴屋に大村甚三郎等と會合して遅く歸ると、翌日

は終日外出出来なかつたのである。

時に日米間の風雲急にして、いつ雨を呼ぶか嵐が来るかわからない險惡な空模様になつたので、日本の基督教徒から遣米使を送つた其の使節の報告會があり、いよいよ全日本の基督教會各派を合同して日本基督教團が成立する其の打合せがあり、引續いて富士見町教會で其の創立會があるので、彼は西村關一と共に上京したが、連日の會合に疲勞して頻りに口渴を覺えた。

七月一日、希夫が上等兵に進んだといふ通知を受けたが、悦藏が靜養のためのお・たか、を伴れて輕井澤の青林山莊に着いた翌日七月八日に希夫は南京を發して上海の陸軍病院に入院したらしいといふ報道を得た。彼の胸中には一抹の憂愁が漂うたことであらう。

八幡町を出發する一日前の七月七日の朝彼は近江兄弟社女學校で生徒に對して語つた講話の中に、肥滿時代には二十四貫五六百匁もあつた自分も今は十六貫五六百匁になつてゐるが、此の上三十年も生きる工夫をして此の學校のために盡したい。年をとつて瘦せて食慾のある人は長命であるとの事である。私は學校の發展を祈りつつ此の言葉をのべた次第であると、しんみりと語つたが、輕井澤へ来て霧の中で毎日靜養してゐると、ここ數年間の辛苦がしみじみ想ひ出される。社内にあつた増井事件、同志社騒動、何とかしてこれが爲に基督教そのものに瑾々つけまいといふ人知れざる苦心の賜がこの病氣であると思へば心も慰まれる所があつたらしい。彼の病狀を心配して見舞ひに來た吉田金之

介は案外彼の元氣なのを見て少しは安心したが、十五日の午前見送つてくれた彼と小諸驛頭で別れる時は其の衰へを思はずにはゐられなかつたらしい。

七月十八日に渡邊稔・池田正が見舞ひに來た。翌日渡邊稔は彼の顔を見つつ、少しく兩の頬に肉がついたやうに見える。と、言つたので、彼は餘程うれしかつたと見え、その事を日記帳に書き記した。

七月二十四日に希夫が上海から出した七月十六日付の手紙が着いたのを讀むと病氣は心配する程でないとおつたので、彼は先づ安心とは言はずに、先づ晴天だ。と、言つた。これまで此の一事に心を曇らせてゐた證據である。

此の月の二日に彼が滿身の努力を拂つて設立した近江兄弟社女學校の校長を辭して高橋虔に其の職を譲つたのも身の靜養を欲したからであつたらしい。彼は此の月の湖畔の聲誌上で、倒れたフランスを背負つて立つ八十三歳のベタン老將軍の事を思ふと、自分が今頃弱音を吐くのは恥づべきだと言つてゐる。

七月二十五日に、きよのが八幡町から來たので、二十七日にはたかをつれて東京に行き、中島今朝吾・松山常次郎を訪ね、夜は銀座を散歩して天金で天ぷらを食べた。

翌二十八日はひどい雨であつたが、それでも神田の古本屋あさりをしたり聖路加病院を訪問したり

したが、二十九日の朝中島今朝吾將軍をつれて輕井澤の青林山莊に行き、西村關一を接待役として、晝は天ぶら屋に夜はそば屋に案内した。

七月三十日の夜は、一柳米來留の招待で中島今朝吾と共に夕食に行つたが、三十一日の朝中島今朝吾は東京に歸つた。

八月十三日正午に輕井澤を立つて千ヶ瀨に行き沖野岩三郎を訪問して神社問題について意見の交換をなし五時過に輕井澤へ歸り、手帖に、有益な話をきく。と、書きつけた。

翌十四日の朝平沼驥一郎狙撃さるといふ新聞記事を読んだ。同時に希夫から南京へ行くといふ知らせを得た。

八月十六日に兩肺の後部が少し痛みを感じたので乾布摩擦をすると忘れたやうに快くなり、十九日の朝六時發の汽車で村田幸一郎に伴はれて上京し大塚醫院に行き大塚院長の診察を受けて元氣で歸つたが、二十一日の午後になつて三十九度五分の發熱があつた。見舞ひに來た栗本清次・日野原重明（聖路加病院醫員）の兩人診察檢察の末肺炎菌を發見したので手當の結果翌日は平熱になつて安心したのである。けれども其の後二週間の靜養中病狀は樂觀を許さなくなつたので九月四日の朝六時輕井澤發の汽車中央線廻りに乗り八幡驛に着いたのは午後九時であつた。

九月五日の朝清野博士の來診を受け午後近江療養院に行つてエツキス光線寫眞をとり栗本清次の診

察を受けて歸つたが其の夜は咳が多く絞るばかりの盜汗であつた。

九月六日の手帖に、朝爽快、日光浴、終日寝たまま、腹直る、夜三十八度二分、家のものやかましく面會拒絶せよと言ふ。と、書きつけた。これから約四週間絶對安靜で看護婦二名付き切りの介抱をした。あれだけ日記をつける習慣をもつ彼も此の期間だけは日記をつけ得なかつたらしい。けれども十月四日の欄には、希夫誕生日・南京。の七字を書きつけてある。愛する一兒が遠き支那に居ることを思つて堪へられなかつたのであらう。此の日希夫からも元氣で軍務に従事してゐるとの端書を父に寄せた。その手紙は十一日の朝彼の手に入つて安心したらしい。

十月十二日から稍元氣を恢復して日記をつけはじめた。それを寫してみる。

十月十二日、九月五日より臥床三十五日目、朝四時起床、鶏鳴を聞く。咳多く九時頃まで出る。夜よく寝る。希夫御用船に乗つた。と。

十月十三日、朝西田天香さん來訪、茶をもらふ、希夫廣島にかへり來り陸軍病院にあり。

十月十四日、朝桃色の排痰、用心用心、安靜、浪川・諸川・高橋・千貫・猪瀬。終日靜かにす。

（此の日體溫三十九度九分）

十月十五日、終日休む、朝一柳さん來訪。

十月十六日、谷口ひで看護婦益々注意を深くす。トロンボーン、アボセーフをのむ。

天川・栗本來診。

遂に内カク終り、散る櫻残る櫻も散る櫻。

十月十七日、宮川夫妻、一柳老母來訪、讀書——鯛。

十月十八日、朝四時三十分、聖書を読む、三國志第五卷讀終る。曇天にて氣力ナシ。

十月十九日、堀内清・村田幸一郎・佐藤安太郎・渡邊清春來訪、夜空セキニテ困ル。

十月二十一日、清春奉天に歸る、平熱、村田幸一郎來訪、夕佐藤安太郎氏。

十月二十二日、朝人工氣胸七グラム入ル、田川・天川來診、大原氏來訪、稔廣島に行。

(人工氣胸療法については、醫學博士清野博が昭和五年五月號の湖畔の聲に人工氣胸療法とはどんなものか。と、いふ題で詳細に説明してあつたので、悦藏は其の原理をよく知つてゐた筈である)。

十月二十三日、銀婚式ニ當ル。山本一清・山田寅之助・西村關一來訪。

十月二十四日、臥床五十日目、朝二百グラム氣胸、吉田金之介氏來訪、稔サン歸ル、希夫京都へ、

希夫手荷物着。

十月二十六日、散髪、午後鎌田漢二・山本治三郎來訪、希夫深草へ入院。

十二月十六日、天氣惡し、終日グツグツする。内炭政二來訪、少食ヲ試みる、影山觸手療法有、よ

く寝る。

十月二十七日、終日氣持よし、午睡一時間半。諸川稔・佐藤安太郎・古長清丸・同夫人・小川祐三來訪、ベツタラを食ふ、讀書。

十月二十八日、西村氏に伏見に(希夫訪問の爲)行つて貰フ、徳富の日本史を読む。

十月二十九日、希夫津に送らる、たか子の外套出来る、大に讀書ス、植村全集を読む。

十月三十日、たか子京都ニ行、山下ヨリ本二冊來ル。

十月三十一日、沖野さん來訪病室にて共に食事をする。氣胸40リ入レル、午後安靜、加藤清正傳を読む。

二十七歳で結婚した彼は、五十二歳の十月二十三日でめでたい銀婚式の日を迎へたのである。その日には、どうして祝はふ、かうして社員たちを招かうと、以前からいろいろ考へてゐたことであらうが、輕井澤から歸つて五十日目の病床に横つてゐたので、どうすることも出来なかつたが、日記帳には一きは大きな字で、銀婚式に當ル。と、書きつけた。此の日村田幸一郎は近江兄弟社を代表して彼の病床を訪問し銀婚式の祝意を表するため押繪と金一封とを贈つて彼を慰めた。

見習士官になつたから備後正廣を送つて來いといふ手紙の希夫から來る日待つてゐたが、入隊中

病に罹つて廣島へ歸つた、京都陸軍病院に入つた、伊勢の津に行つた。といふ情報は入るが、自身で見舞ひに行くことも出來ず、また許されず、希夫も病床にある父を見舞ふ自由を許されぬ身であることは、悦藏の心を多少傷ましめたであらうが、西村關一が陸軍將校の資格で療養所を訪れ、希夫の病状を見て来てくれたので稍安堵の胸を撫でおろしたことであらう。此の上の望は二人共健康になつて快活に握手する日の一日も早く來らんことである。

十一月一日、曇、頭重くボンヤリ。

十一月二日、終日元氣よし、好天氣、沖野先生來訪。

十一月三日、臥床六十日目、町の運動會でのぶ子走る、夕方諸川稔來訪、ハマチ二尾、コチ一尾、刺身ウマシ、發熱三十六度九分。

十一月四日、きよの京都へ、杉山元治郎、大橋五男來訪。

十一月六日、病床漫筆ヲかく、一柳さん來訪。

十一月七日、第四回目の氣胸、四百五十グラム入レル、吉田金之介氏來訪、無糖無熱最高三十六度九分。

十一月八日、漫筆をかく、筒山米次來訪。痰咳へる。

十一月九日、無熱つづく、三十六度七分。

十一月十日、無熱つづく、安靜。

十一月十一日、天川政隆來訪、小崎道雄來訪。

十一月十二日、教團の認可文部省より下る日、日野原忠明來訪。

十一月十三日は臥床七十日目、山路愛山の足利尊氏傳を讀む。

十一月十四日、氣胸五百グラム。

十一月十五日、竹内録之助來訪、例會ありし由、午後來客多、排痰多し、薄黄色の痰に閉口する。

宗教行事中止の旨幼稚園に來る。

十一月十六日、床中支那四千年史を讀む、順調、三十六度八分。

十一月十七日、痰少く終日元氣よし。

(十一月二十四日から二十八日までの日記はつけてゐない。けれども二十八日に彼は病床漫筆第二回を書いて、彼が將菜をさし初めた時から、將菜大成會關西本部長八段神田辰之助・同顧問八段木見金治郎から初段に該當する伎倆確實なる認定書を得るまでの経緯を語り、糖尿病患者があたまを浪費して盤に向ふのは言語道斷である。それを敢てした私はたしかに墓穴を自ら掘つたのであらう。と書いたのである。)

十一月十八日、朝散髪、無熱十日續く。

十一月二十一日、氣胸五百グラム、夜上田貞次郎老人來訪、發熱三十七度六分、清野博士來診。

十一月二十二日、血沈五十三の報告アリ、龜谷凌雲氏來訪、尾崎政明歸還、終日安靜、お瀧さん來訪。

十一月二十三日、朝西村牧師來禱、ふさ伯母來訪。

十一月二十九日、氣胸六百グラム。

十一月三十日、西田天香さん夫妻來訪。

十一月中に體溫三十七度を越えたことは唯一回であつた。此の月六日・八日の兩日に書いた病床漫筆は、倒れるまで。と、小見出しをつけてあつた。明治四十五年七月十五日にメレル・武田猪平・村田幸一郎と共に湖聲社を起し、機軸雜誌湖畔之聲第一號を發行して以來三十年間、ほとんど毎號執筆し來つた彼は、此の年昭和十六年八月號に卷頭「生命を拾ふ」學園だより少女達に告ぐ・近況録の三篇を書いて以來、九・十・十一の三箇月間、直接執筆することの出来なかつたのは、實に齒痒ゆかつたことであらう。けれども十一月になつて健康稍恢復し得たので、深く溜めてあつた堰の水を切つて落した如く、實に潤達流暢な筆致で此の病床漫録を書き初めたのである。

彼の家には來訪者が多かつた。彼は其の日記に來診・來訪・來禱の三熟語を使つてゐる。西田天香・沖野岩三郎の如きは來慰とでも書くべきであつたらう。

十二月一日、西田天香さん、尾崎政明・升崎外彦來訪、天川政隆・栗本清次來診。

十二月三日、臥床六十日目。

十二月五日、吉田金之介氏來訪、氣胸五百グラム。

十二月六日、きよの と たか、希夫訪問、西村關一來訪、晝腹痛、夕軽く食事。

十二月七日、好晴、朝より本よみ、入口の煉瓦積も三分の一出來ル、庭作り長シ。

十二月八日、大戰果をきく、終日ラヂオニュース、浪川岩次郎・諸川稔ニ來テ貰フ、西村關一來訪。

十二月九日、放送悪しくニュース聞こへず、天川氏來診、終日大雨。

十二月十日、チャーチルの間ヌケ面、ルーズベルトの狂人面、スターリンの幽靈面、馬鹿らしく見える。プリンスオブウェルス、レパルス轟沈愉快でたまらぬ。

(此の三日間興奮甚だし。家内より安靜をすすめると、此の戦果を聞いて熱を出さぬ奴は日本人ぢやない。と、叱りつけたのである。)

十二月十二日、氣胸五百グラム。

十二月十三日、臥床百日目、岩村清四郎・木村清松來訪。

十二月十四日、村田幸一郎・小川祐三・浪川岩次郎來訪、松方新夫婦來訪（奉天）

十二月十五日、朝一柳米來留來訪。

十二月十六日、大東亞戦争の興奮にて療養し難く、ガーガーラチオは言ふ。軍歌ばかりきく。

十二月十八日、栗本清次・西村關一・宮内省に出頭御下賜金を頂く。一柳氏來訪、皇恩に感泣ス。

（悦藏病中につき副理事長栗本清次及び西村關一の兩人、此の日午前十一時宮内省に出頭、宮内大臣室に於て御下賜金並に傳達書を拜受して退出したのであつた。）

十二月二十日、西村關一歸社、御下賜金を喫して遙拜後床上に羽織袴にて頂く、皇恩骨身ニ徹ス。

（此の日彼は興奮のうちに愛兒希夫に手紙を書いた。その文面は、

希夫よ、財團法人近江兄弟社理事長吉田悦藏は

十八日宮内省にお呼出しがあつて

かしこくも

天皇陛下

より

近江兄弟社事業御奨励の御思召を以つて御下賜金拜受、代理栗本副理事長、西村理事東上参向）

した。

感謝と感激である。

一柳さんも泣いて喜んでゐます。

一足飛びに誠に多額の御下賜金を拜受し

皇恩の豊かなるに感泣してゐます。

三十有六年の努力遂に

天聽に達したわけです。

皇軍の大捷は胸のすく思ひです。

紅毛人の馬鹿さ加減はナンダカあはれでありコツケイである。

いよいよ年末だ、希夫の給與票を入れて置く、勿論毎月の三十三圓もはいる。

信子もはじめて月給や賞品をもらふ（九十圓もつてゐるよ）

父はまだせきが出るので困つて居る、氣胸も昨日で十回した。

北京の崇貞學園も天橋愛隣館も（清水安三氏關係）

御下賜金があつた。

父の力を入れた同志社大學も無事牧野總長で斷然よくなつた。財政上特によくなつたよ。清水の學校も御存じの通り、更に兄弟社もこの通りで父はホクホク病床にあつて喜んでゐる。今年もあとはい。年末に又母上と信子に行つて貰ふよ、此の手紙より先に谷口さんと信子が行くと思ふ、下村さんには頼んで見るよ 勿よ

希 夫 様

父

と、いふのであつた。

十二月二十一日、谷口ひで、信子と希夫訪問に久居に行く、午後中島中將來訪、福岡・佐藤安太郎來訪。

十二月二十二日、このあたり微熱あり、痰あり、氣持悪しき日つづく、喉いたし。

十二月二十三日、臥床百十日目、ミンダナオ島ニテ米兵暴行、一柳氏ニ家ヲ出ルナト言ひ來ル、誠に氣の毒なり。朝檜山嘉藏・諸川稔、夕西村關一來訪。

彼の日記はこれで終つてゐる。その最後には兄弟社家族數、家庭百十八・六百五十二人・子供二百十三人・學校男八十五人・女六十六人・大學男二人・女一人・専門學校男二人・女三人・中等學校男十六人・女十二人。と、書きつけてある。家庭百十八戸と言へば小き一箇村である。彼が嘗て近江兄弟社小學校を設けたいと計畫したことなど想ひ出しつつ、こんな記録を取つて置いたのかも知れない。

ない。

十二月二十七日、近江兄弟社の全員教育會館に集合し御下賜金拜受傳達式を舉行、社長村田幸一郎は傳達書を捧讀の上、かかる多額の御内帑金を賜るとは眞に恐多い極みである。我等一同一層感奮興起して聖恩の萬分の一にも應へ奉るやう粉骨碎身の努力を致したいと語つた。一柳米來留も唯、もつたいた言はれて、ぼとぼと涙をこぼされた。

十二月三十一日、體溫三十七度二分・脈搏九十三、全身を清拭して多難にして感激深かつた年を送つた。

三十七、菊花に包まれて

|| 昭和十七年 ||

皇紀二千六百二年、昭和十七年一月一日、彼は病床にあつて五十三歳の春を迎へた。けれども體溫は三十六度九分最高で少しく咳嗽があるだけであつた。

一月九日に三重縣久居町津陸軍病院にゐる希夫あてに、

父は變りなく相變らず谷口さんの看護を受けて居ます。家の者皆元氣です、大きな電蓄大修繕がすんで京都より來ました。百二十圓かかるそうですが、ラジオがよく聞えます。そろそろ冬もまん中

で春近しですね。伊吹山真白に見えます。

と、いふ端書を送った。以下は一月中に希夫あてに送った端書である。

一月十五日發

一寸三日程熱が出て困つて居る三十八度丁度、今日は三十六度二分、長期戦の事、十八日には信・孝、さん二人に見舞に行つて貰ふよ、のどが痛くて困つてたが幸に全快、毎日天井を見てポカントシテイル、食欲有、之も人生。

一月十八日發

ハガキ着、ストリーブを圍んで軍談とは羨しいね、今日は大雪、信・孝さんの自轉車が動かぬので訪問延期、毎日一寸發熱するので困つて居るが長い間の山もあり川もある。全快への風景の一つだとのんきに構へて居る。昔の本を讀んで居る。金色夜叉を七百五十ベエジも讀んだ、家無事、谷口さん元氣、久子もあと四五日で家にかへる心配せぬように。(久子は盲腸炎手術を受けたのである)

一月二十一日發

伊吹山が白く美しく東の青空に光つて居る。父は相變らず寢正月、のどは全治みかんもたべられ

る、伊勢の黄色の澤庵は欲しいね、堀内からスグキが来て毎日食べてゐる、皆元氣、長期戦で無言や面會制限を實行して居る。シンガポールやジョホールは父の旅行した所でゴム林もジャングルもよく知つてゐる。まあポツポツノンキニヨクナルヨ。

一月廿四日發

希夫、元氣でよいね、近頃雪や何かで信・孝さん行きなやみ、一人ちやあ一寸行かれず母上は家で絶対忙しい、谷口さんも一度は歸る。看護婦はなかなか無いし一寸困つてゐる。父はノンキに療養するしか方法なし。又かく、

今元氣に本讀んでる、希夫註文の本京都に賣つてゐません、うちのを送る。

一月二十六日發

少し落ちついて来た様子、この工合で又つづくといひです、谷口さん昨日家に歸つた。百何日をよくガンバリくれた。新看護婦は来てゐます。久子昨夜退院火鉢のそばに坐つてゐるよし、うちの人皆丈夫。信・孝さん二月にはやるよ。もうそろそろ封書の手紙がほしいがね。いよいよ皇軍濠洲を

やつつける、バンザイ。比島の新主席バルガスは父と一しよに極東オリンピック大会に役員だった人だ。

一月二十九日發

滋養の爲血液注射三回大腿にした。信子二十グラム、尾崎君四十グラム貰ふ、痛くてやりきれんので棒折れとする、近頃又落ついて来る。今度の看護婦多比良時代さん本當によくやつてくれます。注射が上手で助かります。

一月は不作、散髪もせずに療養して居る、希夫に一度よい顔色を見て貰ひたいね、本はなかなか賣つてませんよ。あと二日で二月、四月になると父も大によくなるでしょう。皆健在、兄弟社根本的に改造中。

一月三十一日發

明日頃にも誰か面會に行つて貰ひたいと思つて居る。信・孝さんとかくよく働くし父の看護に忙しいよ。今日伊吹山が光つて居る、美しい日だ。そのうちに面會可能だと難有。

毎日同じ日がつづく、とうとう百五十日、しかし元氣で暮すよ、新聞は面白いね、本をもつて行つ

て貰ふことにする。

二月號湖畔の声誌上近況録欄に西村關一はこんな事を書いてあつた。

一月十六日には近江セールズ重役財團理事一同、皇大神宮に参拜いたしました。

吉田悦藏氏の近況はまだ手放しの樂觀を許されん状態で、九月以降ベッドより一度も下りることが無かつた由、まだ安靜が第一で夏頃まで面會執筆制限で療養を続けられる豫定です。本人曰く、十二月八日大東亞戦争の始まると近江兄弟社の將來を決定するあらゆる新情勢が毎日各方面に必至の態勢で迫つて来る。この時にどうしてのんきに寝てゐられようかとも思ふが、最早多士濟濟の兄弟社大いに第二世代時代の人達の活躍を祈つてやみません。マレーにでもマニラにでも出かけて行つて御役に立ちたいものです。極東オリンピック大會の時、一つのホテルに泊つてゐたバルガス君がいよいよフィリッピンの大將になりさうです私は彼を知つてゐるので大いに激勵して來たい。こんな千歳一遇の大事に當り寝たままラジオに聞くニュースに切齒扼腕してゐるのは残念であります。せめて御國の爲に村田社長の健在は何よりも有難い事です。一柳先生も元氣な様子、まあ何もかもおまかせ申して、あとの半年は寝てくらすとさせて頂きます。そのうちに病床漫筆をかきます。みなさんの御幸福を祈ります、お見舞下され有がたう、一一お返事を出したいですがおゆるし下さい。

あと數ヶ月して全快の上大いにお返事申します。

西村關一はこの言葉に書き添へて、病床にあつて血湧き肉躍る思ひに精神的の平靜が壞れたのが原因で十一月頃よりも一月の方があまりよくないやうだ。と、言つてゐる。

一月中の體温は三十七度を超ゆること十七回、三十八度を越すこと六回、三十九度四分に達すること一回であつた。

湖畔の聲二月號には彼の筆になる文章は見えなかつた。

二月二日發希夫あての手紙には、

尾崎君より電話にて土曜の訪問の事知らせあり、明日午後来てくれる由、果報は寢て待てと昔の人は言ふ、父は毎日寢て待つて居るよ。本やら何やら届いたでせう、元氣で暮して下さい。この邊毎日無熱、難有。

とあつた。

二月五日發

近頃落ついて同毎日じ工合を繰返して居る。菊地寛の小説ナド讀んで居る。今日は家の三人皆京都行。

看ゴフと定ちやんで晝飯を作つてくれた。兵四樓よりさしみが来てやつとたべた。

希夫元氣の山何より。西村關一・諸川稔二人朝来て大に話した。イヨイヨ六ヶ敷イ世の中ダネ。

二月八日發

ダンダン咳が減るので喜んで居る。希夫も大分本を讀んだね、病床の讀書生活も亦一風變つてゐるね、近頃醫者に頼らない氣分で元氣になつた。信・孝さんよく働くよ。

今日は雪降りこれで今年の雪は仕舞だらう。ジャバ沖の海戦等のニュース皇軍の大勝利、頭ガ下ガルネ、エライ人達ダネ。

(二月九日體量を計る。十五貫五百匁、十四日體温三十六度八分、臥床百六十三日目で歩いてみる)

二月十六日發

尾崎さん待機中一向たよりなし、今日ハ天川氏風邪で氣胸休み、シエーキスピアをよんでゐる。ラジオも聞えるし長時間レコードのオペラを聞いてゐる。のんびり雪と日光の相互出現を窓の外に見て居る。本送らうか、漬物はどうか。

二月十八日發

四一〇

諸川夫人より様子を聞き安心してます。今日は祝日で孝子が旗、出征兵士遺家族のタスキで祈願祭に行く。半田のみち子、日野原忠明の婚約式は明日、今日は二人近江神宮行。均さん母おかくさん善四郎の義妹うちに居る。

この頃ハガキ通信あまりないね。いづれ其のうちと思つて毎日安靜にしてゐる。

二月二十七日發

尾崎さんより様子大きく安心してます。ノートを一寸見た、大分勉強したらしいね。

天川さん今日少尉軍装で来たよ、二月五日付が昨日届いた由、父の様子は益々良し。まだ寒い。

伊勢はよいね。兄弟社の脱皮期だ、少しも心配ハイラス、家のもの健在、又ハガキクレヨ。

三月一日に體量を計ると十五貫三百匁あつた。體温は三十七度を越ゆることは無かつたが、自分ではまだ容易に起きられると思はなかつたと思え、同日希夫に送つた端書に、

いよいよ三月だ、五月には起きられるそうだ、今が静養の正念場だ、キバツテ養生する。暖いね、もう定ちやん足袋はいらんといふ。和子もかへつて来る。孝子もしげんで十日程三階で頭をかかへ

てる。そちらはどうか。北岸立さん出發した。家のことは安心ありたし、早く面會に行きたい。ナー。

と、書いてある。

三月四日は面會三十分、六日は面會一時間十分、八日は二時間、九日は二時間、十日は二時間半の面會をしたが體温は三十七度五分を越えるやうなことはなかつた。

三月十四日に希夫宛に書いた端書には、

左義長で旗が出て居る。曇り目で朝から少しドンヨリして居る。昨朝希夫の夢を見た。もうすつかり元氣かね、明日あたり信・孝さんが面會に行く、もう試験がすんで大喜びだ、昨夕村田・松山代議士が来た。この頃は無熱、痰も少減つた。長い病床だ。

と、書いてある。百八十二日目の臥床に餘程退屈を覺えたらしい。其の退屈を紛らすために他人と話したい。で、毎日のやうに面會を續けて時には三時間四時間の長きに亙つた。

三月二十一日に希夫が除役退院して歸つて来た。夢寐にも忘れなかつた愛兒と十五箇月目の面會である。病氣の爲に陣頭に立つことの出来なかつたのを可愛さうに思つたであらう。しかし生きて歸つて来て話し合ふことの出来たことは、どんなに嬉しかつたであらう。病は養生すれば直る。再び健康になつて國家の爲に盡してくれ、自分も全快してまだ仕殘した仕事をするぞ……言ひながら彼はさめ

ざめと泣いた。

三日の後二十三日の午前突如として体温三十八度九分、脈搏百二十九となり、一時危篤状態に陥つたが、栗本清次・清野博・天川政隆・宇野徹諸醫の協力で生命をとりとめ、二十六日から三日間は栗本清次・天川政隆の兩醫交代にて付き切り、酸素吸入を続け、三十日から四月五日まで催眠薬を服用して眠りを取つた。

四月四日には宇野徹・天川政隆・河村五十鈴の立會診察の結果少く神經過敏となつてゐることが認められた。けれども其の後は奇蹟的に元氣を恢復し順調の経過を取るやうになつた。

湖畔の青四月號の近況録中に、彼の自筆に成る短文が載つてゐる。それは、

去年八月急性肺炎で倒れてから足かけ八ヶ月、まだ病床に釘づけで療養に安靜に日を送つて居る私は大東亞戦争の勃發から、春三月中旬の今日までに生れて曾て経験しなかつた歴史の歩みに胸躍らしつゝラジオ・ニュースに新聞に見聞きしたのであります。

病床の半年に日本の歴史は平時の百年或は五百年の飛躍をしたのです。最早私が全治して世に立つ時ありとも要するに浦島太郎的存在でしかあり得ないと秘かに思ふのです。

日本は世界人口の半分十億以上の人類の安危興亡を双肩に擔ふ大帝國大皇國となつたのです。何たる光榮、何たる大和魂の精華絢爛たる春でせう。経済的にも最早三百億五百億の金高ではやつて行

けません。何千億時代、いや何兆時代です。何もかも一億人で割り勘的に考へねばならぬ時代が來ました。

近江兄弟社も此の歴史の飛躍について行く、イヤ魁をせねばなりません。四月より財團法人近江兄弟社の事業にも重變がある由です。八幡基督教會が大に活動すべき春です。近江セールズ會社も新體制に入るそです。

私の役は靜に全快を待つ一事に盡きるわけですが皇國の萬歳を病床に祈つてやみません。ただ、天皇陛下萬歳です。

幸に無熱形に落ちつきましたが、まだまだこれからの養生ださうです。私は長期戦を覺悟して、理想的に第二死線を越え全治していつか療養の大道を語りたく存じます。數へきれぬ御友達から御親切な御見舞を頂き感泣して居りますが、まだ一一御返事を書く力がありません。いづれ此の夏、又は秋、起床しました時御挨拶申し上げます。御親切を有難う存じます。

吉 田 悦 藏

といふのであつた。これは二月中旬に書いたのであるが、まだ數箇月間臥床を免れないと覺悟してゐたらしい。

湖畔の聲四月號には彼の病床漫筆第四回が掲載され、その終に、人間は一時的の病氣が全快するか

らとて有頂天に喜ぶべきではない。やがて年月が物を言へば誰も彼も死あるのみである。散る櫻のこる櫻も散る櫻。である。と、書いてある。つまり心静かに養生する決心を語つたものであらう。

四月から一柳米來留は京都帝國大學講師として英文學を講ずるやうになり、一柳満喜子が全力を傾倒してゐた清友園幼稚園と保姆養成所は、四月一日から近江兄弟社の教育事業を幼稚園女學校専門部の三部門として有機的な機關をもつ総合教育とした爲、悦藏の計畫盡力してゐた近江兄弟社女學校と統合整備して近江兄弟社教育會館に移轉することとなつた。随つて悦藏のあとを襲いで女學校長となつてゐた高橋虔は辭職して檜山嘉藏が校長兼園長となり教育報國に邁進するやうになつたのである。

四月十八日は日本人にとつて永久に忘るることの出来ない米飛行機空襲のあつた日である。此の日近江兄弟社では第十三回永眠者慰靈祭が行はれ、緑樹の中に紅白の花咲き亂るる北の庄の山麓、納骨堂の石段の下クロウバアの茂れる廣庭にしつらへたる祭場に全社員全家族が集つて一百十一名の永眠者の靈を慰めたのであつた。彼は床上にあつて遙に合掌して舊知の逝ける人人を想うた。午後ラジオで空襲の事を聞いたが容易に信じられなかつた。

四月二十一日に悦藏は病床漫筆第五回を希夫に口授して筆記させた。それは咳痰の苦しさを經驗してこれまで二十數年間近江療養院を經營しながら、病氣といふものが、こんなにまで苦しいものだといふ事を知らずにゐた事に對しての懺悔告白であつた。

彼には同年齡で同信仰の親しい友達の一人があつた。京都市に開業してゐる齒科醫堀内清がそれである。堀内清は昭和五年十二月に彼の口腔診察をして齒槽膿漏の診斷をしたのが最初で昭和十二年十二月には七年間の診察の結果糖尿病の治療をなすべく大阪醫科大學病院への入院を勸告したのであつたが、此の四月に入つて前齒が非常、ゆるんで來たので八日にわざわざ往診して上顎左側切齒と上顎中切齒側切齒の三本を抜去して義齒を作り、十二日の後四月十九日に上顎に義齒を入れたのである。可なり重態ではあつたが、上顎齒が弛緩して食物攝取に苦しみ談話に相當な障害があるので思ひ切つて此の治療をしたのであつた。手術する者せらるる者双方が互に信用し合ひ祈りのうちに無事に此の手術を終つたことを二人は感謝したのであつた。

五月に入つてから、ずつと平熱を續けてゐたが、十三日に三十八度三分に昇り三日の後に平熱となり睡眠も平均八時間を持続するやうになつた。體量は五月十三日に十四貫五百匁、十七日に十四貫六百八十匁、二十四日に十四貫五百八十匁であつた、彼は此の體量の増減を自覺してゐた。

五月二十一日に病床漫筆第六回を書いて、五月一日の朝さし昇る美しい太陽を眺めてゐるうちに、吉田悦藏は復活せよといふ天來の聲を聞いたことを告白してゐる。

六月一日には體量十四貫三百匁に減じてゐたが發熱もなく、だんだん醫師との關係を薄くした。氣胸術も三月二十一日以後中止し、藥も毎日午後三時或は四時に解熱劑半包或は一包を服用するだけに

し、六月九日には便所まで自ら歩き、中旬から前庭に出て散歩したり隣家の盆栽を見せてもらつたりするやうになり、日刊新聞八種を毎日読み、單行本では吉川英治・木村毅・川口松太郎・眞山青果・菊池寛・芥川龍之介・森鷗外・夏目漱石・小泉八雲などのものを片つ端から貪り讀んだのである。

七月には四回だけ醫師の診断を受けたのみで、月末より解熱劑の服用も中止してゐたが、七月二十日に臥床三百十九日目で初めて入浴した時の喜びは譬ふるに言葉もなき程であつた。

七月二十二日に増井庄藏は始めて青天白日の身となつた。思へば滿六年前の昭和十一年七月二十七日に事件が起り昭和十四年七月十日まで滿三年間法醫學の大家達、幾人の錚錚たる辯護士達の鑑定と辯護を受け、大津地方裁判所の陪審裁判から大審院へ更に京都地方裁判所、大阪控訴院、東京大審院と稀有の難解事件として法曹界の注目を惹いてゐたが、遂に滿三箇年間獄裡の人とならなければならなかつた。其の冤罪を堅く信じてゐただけに悦藏の苦みは言語に絶するものがあつた。

此の頃から彼は福永天礎の整體術治療を受け其の指壓療法を楽しむやうになつた。
八月二十七日に彼は病床漫筆第九回を書いて、これを欄筆することにした。それはもはや自分は病床の人でないと自覺したからであらう。

八月一日に栗本清次の診察を受けし後は、十日に天川政隆、宇野徹に各一回診察を受けただけで、ほとんど無病の如く毎日入浴し一切の服薬を避けてゐた。近江兄弟社に取つてあまりに重要な人物で

あるといつて、氣胸術・注射・服薬に手を盡しすぎた、あまりに可愛がられすぎた。此の際寧ろ醫者から縁を切つて悠悠無病の人として日を過したいと彼は思つたのである。

九月三日に體量を計つてみると十四貫九百匁であつた。七月八日から四百匁の増加である。

九月六日には近江療養院に行つて見た。臥床三百六十七日目に北の庄の空氣に觸れた時、今から三十七年前に彼が十六歳の少年で、やさしき恩師メレルと共に散歩して此所に來た時一疋のばつたを捕へたのが、此の近江療養院の起原であつた事、最初此所で息を引き取つた遠藤觀隆のことなどを夫れから夫れへと想ひ浮べたことであらう。その遠藤觀隆に食事を運んであげた母のりうが此の世を去つたのもはや二十六年の昔となつた。生きてゐれば丁度喜の字の祝をする七十七歳である。まだ此の上十年も生きてゐられる歳であるのに、五十二歳で亡くなつたのだと思へば。自分はもう亡くなつた母よりも一年多く生きてゐるのだ、父は三十五歳の若死であつた。もう自分は父よりも十八歳生き永らへたのだ。などと考へたことであらう。

彼は病院から歸つて風呂に入り八時間ぐつすり寝て眼を覺してみると體温は三十六度脈搏は九十二であつた。もう全快に近いと彼の自信はますます強くなつたらしい。

九月十七日の朝、叔父金之介の一粒種吉田壯藏中尉は無言の凱旋をした。吉田壯藏は大正二年七月一日生れの三十歳である。シンガポール攻畧戦に参加、プキテマ高地の夜襲戦に英靈となられたので

ある。此の日こそ彼は愛子希夫の顔を涙なくして見ることは出来なかつたであらう。

日は確實にわからないが、彼は九月の下旬に湖畔の声原稿回生漫語を書いた。題目の示す如く彼は死より起きて生に回つたことを自覚したのである。彼は此の文中で在來の八幡組合教會が新に發足した日本基督教團に合流したからは、近江八幡教會の宗教活動に全力を捧げたい。近江八幡といふ小都會に生活する近江兄弟社の社員は、創立當時の目的の通り、傳道の爲であつて自己の生活の便の爲ではない。と、絶叫して社員たちを勵ましてゐる。

十月から一柳米來留は東京帝國大學文學部の講師を兼任することとなつた。

九月二十三日に悦藏は松山常次郎と共に近江療養院に行つて來たが、入浴後翌朝まで九時間の睡眠を取り、翌朝體温を計つてみると三十六度八分であつた。

九月二十七日齒痛のため京都から堀内清の來診を得て、夕食後元氣を恢復した。翌二十八日には新町まで散歩し、二十九日には近江兄弟社圖書館まで歩き、近江兄弟社の食堂を視察したりした。のみならず十月六日には自轉車に乗つて七八町走つてみたが、別に息切れもしなかつたので、十月十日午後二時から懇意なる友二十名を招いて恢復感謝會を開いた。そして十月十九日には近江兄弟社の運動會が開かれたので教育會館まで自動車で行き擴声器で社員一同に挨拶をした上、歸途は徒歩で平氣であつた。

十月二十一日には清水安三の訪問を受けて愉快に語つた。兩人の間には寸毫の隔意もなかつた。

十月二十八日限り彼は療養經過表の記録を打ちきり、一切體温も計らず自己を無病息災の人として其の日其の日を過してゐた。彼は回生漫語の第二回を十一月號の湖畔の聲に掲げて、

私が一年振りで街を歩いて居ると大抵の人は行きすぎてから小首を傾けて私を見る。吉田ですが、と、聲をかけると、やあ、さうかと思つたんですが。と、答へる。

と、書いてあるのを見ると、ずつと其の後は町内のあちらこちらを散歩したらしい。時々少時間碁を圍んだり將碁をさしたり、歌を歌つたりピアノを弾いたりしたが、此の頃から讀書力が無くなつたことを非常に悲しんだ。

十一月十日の午後、自分でピアノを弾きながら、三百二十番、主よ終までつかへまつらんの讚美歌をひとりでしんみり歌つた。

彼は熱心に基督教新教を信じてゐたが、死者の靈魂については基督教新教の説く神學に満足しなかつた。彼は自分の父が放蕩であり酒癖者であつたことを寧ろ憎んだ。彼が基督教を信するに至つたのは父の放蕩と酒癖とが最大原因であつた。父のやうな生活をさせまい、せまいといふのが彼の傳道心であり信仰であつた。けれども彼は其の父が天上にあつて今は眞面目な生活をしてゐると信じ、それを公言した。神を信じなかつたから、洗禮を受けなかつたから其の魂が地獄に行つてゐるなどは夢

にも思はなかつた。彼は大正二年に紐育の神學校で聖書研究をしてゐる時、既に此の問題に就いて質問してゐる。けれども彼は基督教を知らずして此の世を去つた人が加特力教の如く煉獄にゐるなどは思はなかつたらしい。それらの人達は神が善きやうに處置して下さると信じてゐたやうである。彼はもう自分の病も恢復期に近づいたと思ふ頃、きよの と共に町に出て佛具を買ひ集め、父の信じてゐた浄土眞宗の西光寺住職柴田玄鳳に依頼して自宅で讀經をしてもらつたのは十月の初めであつた。

十一月十二日に彼は門司市本町の鶴原誠藏と和歌山縣有田郡廣村の玄後宇一郎に宛てて手紙を書いた。

拜呈

兄弟社は幸にも今度

高松宮殿下 御台臨の恩命に浴し一同感激致し居ります。これ又外側にありて御援助下されし貴大人の御恩と存じ厚く御禮申上ます。

私もだんだんよくなります、來年は九州に伺ひたいです。

いつもの御親切を感謝して、

吉 田 悦 藏

鶴原誠藏 大兄

十一月十二日

彼はこれまで滿鮮に旅行する度、九州に旅行するたび、必ず門司に行き鶴原家を訪問したのであつた。彼は此の恩命に接した時先づ其の事業の後援者であつた所の鶴原誠藏に此の手紙を書いたのであつた。

拜啓

御見舞狀を頂き有難うおします。だんだん日藥で全快の日をのん氣に待つてゐます。

今度私共數十年の努力が結晶しましたか。

十一月某日

高松宮殿下 近江兄弟社へ御台臨の恩命に浴し一同大感激、準備中です。クリスチャンの團體にかかる恩命は有りがたい事です。

十一月十二日

吉 田 悦 藏

これは玄後宇一郎に送つた手紙であつた。

高松宮殿下の台臨は十一月十八日との御沙汰があつた。けれども彼は其のありがたい日に、尊い御姿を拜し奉るだけの健康が恵まれてゐなかつた。のみならず家人には去りげなく装つて只管その日を

待つものやうではあつたが、實は日々に重態に陥りつつある事を自覺してゐたらしい。

十一月十六日に西村關一が来て、言上書の草稿を読んだ。彼は愼ましく聞いてゐたが、西村關一の歸つたあとで聲をあげて泣いた。萬感がこもこも彼の胸を襲つたのであらう。

近江兄弟社の社員は理事長である彼を除く外百八十八人が社員である。その中の村田幸一郎・古長清丸・山本治三郎は彼が明治三十六年に十四歳で滋賀縣立商業學校に入學した四十年前からの知己である。魚屋町時代に共に祈り共に聖書を研究し初めてから三十八年間變らない信仰の友となつて近江兄弟社を護つて來たのである。瀧川健次とは三十年、西澤正治とは二十九年、浪川岩次郎とは二十八年間の同業者である。初めてガリヤ丸を琵琶湖に浮べた時其の船を快く走らせたのは西澤正治といふ若い機關士であつた。鎌田漢三・山田寅之助と柿元榮藏・隈元周輔とは宗教と建築とに分れて各二十六年間、輕井澤に出張して青林山莊を守つてゐる山本庄之助と、支那へ出張してゐる宮川基一とはもう二十六年・二十五年勤めてゐる。前田重次・佐藤正夫・武田英治・原仙太郎・大原沈の五人は二十三年間共に働いてくれた。大同生命ビルが四年目に竣成した時村田幸一郎の書いた報告書を例會席上で朗讀したのは原仙太郎であつた。乾燥無味なるべき報告書の朗讀を聞いて皆涙ぐみ、一柳米來留をして一大説教である。言はしめたのは十九年の昔となつた。佐藤安太郎と始めて知つたのも二十三年前である。義弟の渡邊清春が滿洲へメンソレータムを賣るのに骨を折つた以上に彼はメンソレータ

ムの販賣擴張に東奔西走してくれた。吉田政治郎と西村關一が入社してから、もう二十一年になる。水口と堅田とに随分力を入れて傳道したものだ。川上東一・大河内深・山本正一・諸川稔が入社してから二十年だ。諸川庄三やら諸川稔やら二つの名をもつてゐる彼は宣傳部員としてよく活動してくれた。小川祐三・幸辰男・島津三男・豊田清次の四人は揃つて建築部に十九年間勤めてゐる。近江療養院長の栗本清次が北の庄に來てから十八年になる。大沼清次が栗本清次になり、金澤醫學士が醫學博士になり、よく脈を握つてくれたものだ。同じ療養院にゐる西川與三郎はもう二十七年勤続で永原庄次郎も二十三年目である。大正年間の最後の年に入社した遠山午之助・小田幸一・辻英次郎も、同年に入社した古長清丸と共に十七年間勤めてくれたのである。十五年以上勤めてくれた者は、西井一郎・内炭政三・筒山米次・野村四郎・武田襄の五人である。十年以上勤めてくれた者は、川村壹太郎・宇野與三五郎・渡邊稔・後藤與三郎・川島令造(以下十四年)浦谷道三(十三年)池田延男・西井二郎・庄司憲太郎・宮川督・佐藤久治・森三郎・高橋虔・檜山嘉藏・下村清太郎(以上十二年)遠藤保造・藤谷正三(以上十一年)伊庭兵三・廣瀬新次郎・大橋寛政・池田正・山本治三郎・宮原吉太郎・伊藤定一・庄司幸之助・福井孝一・三原國松・高木勇治・千貫清一郎・江川長三郎・天川政隆・柴田五郎(以上十年)の三十三人ある。その中でも武田襄・高橋虔・渡邊稔は親子二代の勤続である。八幡教會の創立者ともいふべき千貫久治郎の後繼者千貫清一郎の居ること、初めて兵主村野田に

農村傳道を聞いた時はまだ生れてゐなかつた浦谷道三が今は海外へ留學してゐること、自分達を基督教の深みへ追ひ込んでくれた四十年前の傳道者大橋五男父子が一緒に働いてゐること、馬場の青年會へ中學生服で西村關一らと一緒に來た中村穰が浪川岩次郎の妹浪川かつと結婚して共に教鞭を執つてくれてゐることなど想ひ出は果しなく續く。百八十八人が斯うして平和に働いて行けるのはみな信仰のお蔭である。同じ信仰にあつてこそ、今日の近江兄弟社があるのである。若しも近江兄弟社から此の信仰を取り去つたならば残された形骸は單なる營利會社である。如何なることがあつても近江兄弟社から信仰を取り去つてはならない。創立三十八年間煙草の煙を立てず酒の香を漂はせた事のない純潔な近江兄弟社を永久に信仰の中に屹立させたい。自分は一日も早く全快して其の事を説くだけの生活をしてよ。

そんな事を思ふと彼は堪へきれなかつたのである。妻のきよのが何と諫めても彼は泣いてやまなかつたのである。

十一月十七日の朝彼は風呂を立てさせ、ゆつくり身を清めたあとで、蒲團も敷布も新しく取り換へさせ、着物も新しいのに着換へ、遙に皇城を遙拜したあとで、靜に祈つて精神的の準備を整へて十八日を待つたのである。

あくれば十一月十八日、かしこくも高松宮宣仁親王殿下、近江兄弟社に台臨せられるめでたき御日

である。

悦藏は朝來身を清めて床上に皇居を遙拜し、靜に時の至るを待つた。きよのは服を改めて心筋の悦藏の代理として近江兄弟社本部門前に、殿下の御成を迎へ奉つた。

午前十一時四十五分、殿下の御乗物は近江兄弟社本部門前に御着、颯爽たる御態度凛凛しき御軍装にて階下の賜謁室に御入りになられ、一柳米來留・村田幸一郎・栗本清次・佐藤安太郎・西村關一及び悦藏が理事たる同志社大學總長牧野虎次の六人に賜謁、並川滋賀縣知事侍立のもとに村田幸一郎の言上書を御聴取りの上、直に階上に設けたる食堂にて縣知事以下十名に陪食を仰せつけられ、午後本部門前の圖書館を御覽あらせられ、御乗車にて建築事務所へお出でになり、メンソレータム工場を御視察、更に大林コドモの家、清友園幼稚園、近江兄弟社女學校へ御成になられ、午後二時十五分に醒ヶ井養鱒場へ向はせられたのである。

近江療養院長の栗本清次は副理事長だ、殿下奉迎に萬全を期してゐるだらうから、わしの病狀を知らせるな。と言ひつけられてゐる。きよのは、奉迎がすむとすぐ家に歸つて彼に酸素吸入をさせた。そして台臨の御模様を語つて、あなたが健康であつて奉迎することが出来たならば……と、言つて泣いた時、彼は苦しい息の下から、馬鹿を言ふな。萬事の黒幕になるのは僕の本分だ。こんな光榮に浴した近江兄弟社は、もう獨立ちで行けるだらう。迫害もなからう。すべてが安心だ。と、言つて

きよのを叱つた。

それから時計を見つつ、今はこへお出でになられた、今頃はどこへ。と、言ひながら寒いなあ御無事で御歸りになつていただきたい。などと心配顔で言つてゐるところへ、一柳米來留・牧野虎次・村田幸一郎が來た。悦藏の爲に御陪食の食膳も届けられた。

牧野虎次が今日の模様を一通り話すのを聞いてゐる彼には時時呼吸困難が來た。一柳米來留が涙ながらにさし出した手を堅く握つた彼は、總ての名譽はあなたに。と、英語で言つて泣いた。一柳米來留は簡単に、いいえ・みなさんに。と、言つて涙をこぼした。傍に居た希夫がさめさめと泣いてゐるのを見た彼は、希夫、覺悟せい、兄弟社の使命は傳道だぞ。この事を忘れるな、いいか。と、はつきり言つた。希夫は涙を拭つて、大丈夫、父の精神は僕がみな受けついでゐる。と、言つたので、彼は安心したやうに、よし。と、いつたが、階下に居る村田幸一郎、四十年間一度も喧嘩をしなかつたその村田幸一郎に何か言ひたい事もあつたのであらう。まだ村田さんは居て下さるか。と、何度も何度も希夫にきいた。

間もなく醫者は來た。事態の容易でない事を告げた。

十一月十九日、呼吸困難が続いた。午前中彼はきよの一人を病室に入れて、跡切れ跡切れに言つた。

二十七年間よくつくしてくれた、あんたはわしの食べたいものをよく知つて、それを調理してくれた。あんたが臺所で忙しかつたのも、お客が多かつた爲だ。みんなわしのお客だ。ゆるしてくれ、ありがたかつた。わしの身に萬一の事があつても心配するな、子供はみな善良だ。そして一人前だから他人に迷惑をかけるやうな事もなからう。のぶは今望みをもつてゐる。たかも希夫も神様がよいやうに護つて下さるから安心するがよい。

夫婦は此の世ばかりぢやない。いつまでもいつまでも一緒に居ようや。ついておいでや——

言ひ終つて彼は手さしのべた、其の手は温かつた。きよのは一室に退いて、いよいよ時は近づいたと覺悟をきめた。

午後三回の注射をしたが病勢は劣へなかつた。翌二十日の午前一時半から十二時までに七回の注射をした。彼は其の痛みに堪へかねたと見え、死を恐れはしない、勇んで死ぬから注射のいたみを與へないでくれ。と、言つたが、病勢の募るのを見過しにするわけにも行かぬので午後五時から十二時までに又六回の注射をした。

翌る日の午前二時前に彼は妻のきよのに對つて言つた。

苦しくなつて來た、一かばちか横になりたい。横になる前に室内をみんな片つけてくれ。

きよのは靜に室内を整頓した上、彼を抱へて横たはらせた。彼は枕に頭を載せて天井を見つめた

まま何にも言はないで極めて靜かに息を引き取つたのであつた。時は昭和十七年十一月二十一日午前二時五分。彼の信賴する栗本清次・天川政隆は最後まで彼を見守つたのであつた。

四時間の後午前六時に親戚や近江兄弟社の同人達が物言はぬ彼の寢臺を圍んで、彼が十日前に自分でピアノを弾いて心ゆくばかり歌つた三百二十番の讚美歌を涙ながらに低吟した。

かくて午後七時に至つて鎌田漢二の司式で納棺式を行ひ高橋虔の式辭があつた。

十一月二十二日、近江兄弟社の社葬として彼の葬儀は執行せられ村田幸一郎を齋主として儀式は進められ西村關一が葬儀委員長となつた。

午後一時三十分吉田政治郎司式の下に自宅にて出棺式執行午後二時彼は永年住み馴れた池田町五丁目の家を出て八幡教會に進んだ。彼が生前兄弟の如くにした人人の手に護られた柩は爲心町の本部及び圖書館前に少憩して教會に着くと六百の會衆は肅然として彼を迎へた。

午後二時三十分から佐藤安太郎の司會で告別式が行はれ、四十年間最も親しくした現社長村田幸一郎は彼の履歷を讀み、内炭政三の式辭があつた。その時、メレルが兄弟社を代表して述べた短い弔辭は眞情溢れ全會衆を泣かしめた。北野源治・大橋藤造・滋賀支教區長内炭政三らの弔辭があつて告別式を終り、柩は肅肅と會堂を出で彼に最も因縁の深かつた魚屋町の創の家と事務所との前に少憩して社員と其の建物とに永久の別を告げて西山の火葬場に向つたのであつた。

かくて彼は此の世に生を受くる事滿五十二年八箇月で神の御許に召されたのである。此の傳記を終るに當つて、殘されし彼の半身であつた、きよの夫人の感慨を聞くことにしよう。

主人はもういよいよ全快の見込が無いと自覺した時、如何にも嚴格な面持で、自分は死に對して少しも恐怖のない事、又自分は何等それに對して心配をして居らぬことを子供達に話しました。私には子供については神様が適當に守つて下さるし、又世間の人人や自分の友達が子供たちの事をよく知つてゐて下さるから心配する事はないと申しました。

亡くなられる少し前に、私に對して長い間病氣の世話をよくしてくれた。食物を注意して調理してくれた事など本當に感謝してゐる。と、申されました。そんなに最後まで意識が明瞭で少しも言語に濁りがありませんでした。

しかし、刻刻に病勢が募るにしたかつて、呼吸困難を覺え初めた時、何回も何回も痛い注射をするのは可愛さうでしたが、醫者の道徳上私たちの要求ばかりを容れて下さるわけにはまゐりませんでした。

最後に吉田は私の手を握り身の廻りを美しく寢室をきれいに整理してくれと申しました。そして如何にも自分の最後の準備を整へるかのやうに、室内を整頓させて、いちかばちかわからぬが横になつ

てみようと云つて、私に抱かれつつ横臥したまま、間もなく何の一言もなく天井を見つめたまま息を引取つたのであります。

吉田は平生から人間は眞理に服従して行くなら世の中に不満も不服もない筈だと申してゐました。四回も大手術を受けて生死の境を走つたこともありますが、いつも總てを神に任せて安心してゐたやうであります。

最後の大病に罹つた時。此の病氣が直つたならば兄弟社の事業は若い人達に任せて、自分は傳道のお手傳ひをしたいと申してゐました。八幡の教會を日本一にしたいといふことも理想の一でありました。ブラウンといふ人が日本に来て平假字で聖書の翻譯をしたが、日本人である自分は完全な日本語で誰にでもわかるやうに聖書の翻譯をしたい。そして日本精神の基督教を同胞に傳へたいと度度申してゐましたが、その目的を達しないで亡くなつた事は本當に残念なことであります。

私は吉田と結婚いたしましたから二十七年になります。結婚いたしましたから吉田の人物を知れば知るほど、私は吉田の妻としては適任でないことを身に泌みて感じました。そして其の事を訴へますと、吉田は自分自身も決して完全な者ではないのだから、御互に修養して努力しようと申されましたが、私としては吉田の亡くなつたあとで、あれもこれもと自分の不行届ばかりであつた事を想ひ出して自責の念に堪へないものがあります。

吉田は最善をつくして私を庇つてくれました。私は東北人で關西人にはわかりにくい言葉でした。吉田は先づ私に言葉遣ひから教育してくれました。農村傳道に行く時出来る限り私をいつしよに伴れて行きました。それはつまり私を教育する爲だつたのです。

私の家はいつもお客があつて臺所の非常に忙しい家でした。随つて料理に苦心しましたが、吉田は外で食べた料理に美しい物がありましたら、その料理法をきいて来て私に教へてくれました。結婚式へ行つても、宴會へ行つても、汽船に乗りましても、必ず私に持つて来て下さる土産は其の献立表でした。本屋に行つて自分の書物を買ふ時でも私への土産にする料理に關する書物を買ふことを忘れませんでした。吉田が私を日本内地は勿論、臺灣・滿洲・朝鮮にまで旅行につれて行き、私一人をアメリカまでやつてくれたのは、主として食物の智識を得させる爲でした。

吉田は地理や歴史に非常な興味をもつてゐました。有名なお寺やお宮は大抵知つてゐました。數日ばかりで大和巡りをして佛像や壁畫の研究をしたり研究材料を集めたりしました。

吉田は繪に趣味をもつてゐました。ことに油繪がすきで、いろんな角度から畫家の氣持を尊重してゐました。それから陶器や骨董にも趣味をもつてゐましたから、骨董屋で物を買つてからあとで代價をきくといふ風でした。自分の善いと思ふ品を買つたあとで、こんなよい品をそんなに安く賣つてもよいのですかと、本氣で言つたこともありましたが、

吉田は音楽が好きでした。西洋音楽も日本音楽もどちらも好きでしたが、義太夫、三味線など其の上手下手をよく聞きわけました。けれども自分の聲は日本の歌にはふさはしくないので西洋ものを歌つてゐました。音聲がたつぷりで、西洋にゐた頃オペラの支配人から練習すれば立派な歌手になれるといはれた程でした。ヴァイオリン・コルネット・トランペット・ピアノが好きで、みな一通り揃へてありまして、コルネットは暇のある時楽しんでゐました。傳道に行く時もよくコルネットを持つて行きました。

吉田は非常に映畫と芝居が好きで、どこへ行つても必ず映畫館か劇場へ行きました。手帖には必ず到る所で見えた映畫・芝居の藝題と、食べた料理の名を書きつけてあります。

吉田は來客の多いのを喜びました。來客は政治家あり商人あり學者あり醫師あり牧師あり僧侶ありといふ風で、私の家は常に千客萬來でした。その話しぶりはいつも朗かで家庭内にはいつも笑ひ聲が響き渡つてゐました。

吉田は讀書家でしたから書物は一萬冊以上あります。それも偏頗でなく宗教・哲學・地理・歴史・文學・法律・趣味などで、雑誌は十五六種も取つてゐました。吉田はその書物を精讀しないでも一通り目を通しました。書物を扱ふのが注意深く、讀みかけたベエジを折つたり指に唾をつけてめくることを非常に嫌ひました。書物を粗末に扱ふのは著者に對して不敬だと申しました。

あまり讀書をするので、心配して注意しますと、これは自分ばかり讀むのではない、讀書をしない人が周圍に多いから其の人達に代つて讀むのだと申しました。どこへ行つてもカバンの中に書物を入れて行きました。外國へ行く時など日本の書物をトランクに一杯つめて行きました。

吉田は歌を作る事が好きでした。近江兄弟社の歌・近江兄弟社女學校の歌・近江家政塾の歌など十四五の歌を作りました。

吉田は人を使ふに適材適所といふ事を考へてゐました。小さな弱點を見ないで大きな特徴を生かしました。他人の悪口を持つて來ても相手にしませんでした。どんな人間にでも長所があり美點があると言つてゐました。悪人は悪人で毒藥とし、使へばよいとまで申してゐました。

吉田には商才がありました。その商才を近江兄弟社のために捧げ得たことは幸福なことだと思ひます。これは父祖の遺傳かも知れません。

吉田は傳道といふ事を死ぬまで忘れませんでした。傳道の爲であるならば暑からうが寒からうが、夜であらうが晝であらうが、所も時も構はず駆け廻りました。自分の一生を通じて最も大切な事は神に對する奉仕だと常に申して居りました。

病床漫筆が九回で終を告げたのは、もう自分は全快したと思つたからでせう。これから三十年は生き延びたい。そのうちに子供等も他へ行くだらうから、二人で靜に餘生を送らうよと、度度申してゐ

ました。そして絶えず聖書を読み絶えず祈つてゐました。

十月頃までは元気で朝夕は一時間乃至一時間半ぐらゐ、八幡の町を隅から隅まで散歩するので、いつも私はついて行きました。病院まで三回、自動車で停車場へ二回、土田の新道を通つて自動車の遠乗をした事もありました。その度に此の調子ならば大丈夫だ。こんなに恢復したのは確に殊勳甲だと喜んでゐました。

二人の看護婦も用事がなくなつたので一時返しました。そして私が看護婦がはりになると申しますと、どんな時でもどんな場合でも一緒について来い、夫婦は此の世ばかりではない、あの世でも夫婦だと申しました。今になつて考へますと、それが私への遺言となりました。

十月十日には床上げ祝をして兄弟社の人たちに来ていただき非常に喜んでゐました。それから十月十五日には兄弟社の運動會がありましたので是非行つてみたいと申しますので久しぶりに洋服を着ましたが、洋服があまりにだぶだぶなので鏡の前に立つて悲しさうな顔をしてゐるのを見た私は横を向いて泣きました。それから自動車に乗つて私と二人で会場へ出かけ、擴声器で五百人以上の方向に御挨拶をいたしました。これが兄弟社の皆さまへの最後の挨拶だつたのでございます。

兄弟社から自轉車で歸る度に門から玄關まで讚美歌を口ずさみ、玄關へ着くと口笛を吹いて家内の誰かを呼びましたが、もう其の讚美歌の口吟みも口笛も聞くことは出来ません。兄弟社からの歸りが

半時間一時おそくなる時は必ず電話をかけてくれました。旅行中一日歸宅の豫定が狂ひましても必ず端書か電報かで知らせてくれましたが、もう其の電話も聞かれず端書も電報も來ません。吉田は今天國で私を待つてゐてくれます。此の世の旅路を終つた時私は喜んで吉田の所に行きよき報告の出来るやうにと祈つて居ります。

思ひは盡きません。ただ吉田が今私に語つてゐる事は何だらう、望んでゐる事は何だらうと考へます時、吉田は自分と同じやうに信仰の下に神の前に正しく清く生きて自分の所へ来い。と、いふ聲が聞えるやうに思はれます。私も其の日を樂んで待つてゐます。これ以上は愚痴になります。

吉田は病中近江療養院の皆様から手厚い治療を受けましたが、清野博さま、今村荒男さま、河村五十鈴さま、上原純之助さま、志田福藏さま、堀内清さまのお醫者さま方から非常に親切なる御注意や御診療を受けました。それから鶴原誠藏さま、齋藤惣一さま、西田天香さま、牧野虎次さま、野々村謙三さま、半田均さま、大村甚三郎さま、岡部五峯さま、山本一清さま御夫婦の、御來訪下された時は非常に喜びました。ことに吉田と同郷であり同窓であつて町内に住んでゐられる中村正次郎さま御夫妻の御親切は言葉では言ひつくせませんでした。吉田があんな病氣になつて途中で擦れちがつても顔を見忘れるほど瘠せ衰へてゐるのを見ると誰も遊びに来いなどと言つて下さる人はありませんでしたが、中村正次郎さんは、菓子が來たから果物が來たからと言つて度度お招き下さいました。吉田も

喜んで呼ばれてまわりました。中村さんの奥さまは三日にあげず訪ねて下さつて吉田の様子をおきき下さいました。その御親切は死んでも忘れられないと思ひます。

吉田は病中に親切な皆様から美しいお花をたくさん戴きました。いろいろな物を頂戴しました。その御親切は一生を通じて忘れられないと思ひます。

そして吉田は其の大好きな美しい菊の花に包まれて天國に召されたのであります。その日は母りうと同じ二十一日といふ日でありました。

最後に彼が永眠した時近江兄弟社の社員であつて十年以下勤続者の氏名を掲げて置く。

九年勤続者は木下光次郎・岩橋文夫・江川政治・島田久三郎・西川洋一・田中英一・福井鐘動・安田馨・猪瀬久雄・小森熊吉・内炭三次郎・田口敏三・清水鐵之助・中村穰・錦織恒夫の十五人。八年勤続者は垣内啓三・水野清一・長屋順次・津田信重・小泉善之助・遠山保・内出政美・大橋五男・西村與左衛門・中野清一・藤田八十次郎の十一人。七年勤続者は大屋篤・下杉勝次・原田信夫・川瀬忠一・西澤義夫・山田貞雄・中江幸雄・小杉利男・伴 米藏・川口正彦・中川末吉・北岸立三の十二人。六年勤続者は末次 操・川崎幸次郎・尾崎政明・小椋一男・岡田 潔・松井 潔・田村延太郎・鈴木伸雄・三浦重雄・堀川武雄・金韓星・檜山 晃・下杉勝治・龜山主計の十四人。五年の勤続者は

安田良夫・太田國義・徳田正治・西井一三・鈴木幸平・尾賀義次・濱 春一・の七人。四年以下の勤続者は、増井 修・井上重吉・奥野耕二・多和田賢一・山田定吉・天川 誠・小山 博・橋本茂樹・山下長次郎・荒木 一・坊田一二・山本三郎・中村與惣吉・苗村惣一・大橋一男・林 一・西本 守吉田希夫・柿元廣志・福井角左衛門・井上利男・梅村作左衛門・田中春夫・西村留三・吉原豊治・田井中千造・川村與三松・江川清之助・廣瀬廣吉・祐野助右衛門・川瀬文夫・大橋秀治郎・川村治郎吉吉川榮一・山本永俊・浦谷拓増・齋藤 一・小西太吉・中川篤藏・水谷昌夫・庄野昌士・村田明郎・松村義敏・半田忠明・千葉常雄・西川仲二・乾 次郎吉・奥野與三吉・河村七造・川村繁吉・藤本正市・山本小三郎・東郷 武・谷 新造・高野丈之助・南 小三郎・加藤末吉の五十七人である。

合計百八十八人の社員が同信一體となつて湖畔に純潔なる國を建設するために働きつつあるのである。これらの社員達に後事を託して彼は神のみもとに召されたのである。五十三年の生涯中その三十八年を神に捧げて奮闘した吉田悦藏の生活は輝かしく勇ましいものであつた。その輝かしさ勇ましさを更に幾層倍となすべき重任は懸つて此の残された百八十八人の双肩にあるのである。

年 表

一歳、明治二十三年（二五五零）三月九日神戸市兵庫永澤町に生る。

四歳、明治二十六年（二五五三）三月妹まつ生る。
 六歳、明治二十八年（二五五五）舊正月十日両親に伴はれて大阪の十日戎にまゐる。
 七歳、明治二十九年（二五五六）三月十六日弟徳藏生る。四月一日兵庫尋常高等小學校尋常科に入學
 月日不詳母りう實家に歸る。片假字の端書を母に贈る。母歸り來る。
 八歳、明治三十年（二五五七）三月三十日尋常小學校一學年修了第二學年となる。
 九歳、明治三十一年（二五五八）四月一日尋常小學校第三學年となる。
 十歳、明治三十二年（二五五九）四月一日尋常小學校第四學年となる。
 十一歳、明治三十三年（二五六〇）四月一日尋常小學校第四學年卒業、高等小學校第一學年に進む。
 十二歳、明治三十四年（二五六一）四月一日高等小學校第二學年に進む。五月二十四日父久介髮を剃
 り子供達に前非を謝す。五月二十六日父久介死す享年三十五。
 十三歳、明治三十五年（二五六二）一月二十日第十三學級副級長を命ぜらる。四月二十三日第五學級
 級長を命ぜらる。
 十四歳、明治三十六年（二五六三）三月二十五日兵庫尋常高等小學校の高等科第三學年終了。成績優
 等。精勤賞を授けらる。四月一日滋賀縣立商業學校本科第一學年に編入せらる。
 十五歳、明治三十七年（二五六四）二月八日、日露國交斷絶一四月一日商業學校第二學年に進級。

十六歳、明治三十八年（二五六五）一月一日米來留滋賀縣立商業學校教師として着任。二月四日始め
 て米來留の顔を見る。同日米來留を魚屋町の家に訪問。二月七日夜米來留の宅にはじめたる聖書研
 究會に列席す。二月十三日聖書研究會下級組の書記となる。二月十九日八幡教會に始めて出席。二
 月二十六日八幡教會にて森山寅之助の説教をきいて感動す。三月末日米來留と共に宮島に行き宇品
 港にて陸軍省倉庫に紛れ込む。四月一日第三學年に進級。四月八日魚屋町なる米來留の宅に同居す
 七月六日の夜始めて祈る。八月十日米來留と共に富士登山、神の存在を知る。九月二十六日受洗。
 十七歳、明治三十九年（二五六六）一月十九日商業學校内に亂暴事件起る。一月二十日英文天路歷程
 四百ペエジを読み終る。二月東北師範救助運動をなす。四月一日第四學年に進級。七月五日妹まつ
 死す。享年十四。八月滿鮮修學旅行をなす。九月二十六日井上姓を廢して吉田を姓とす。
 十八歳、明治四十年（二五六七）三月二十一日米來留と共に新築の青年會館に移る。三月二十五日滋
 賀縣立商業學校卒業。同日米來留商業學校教師解備。米來留一箇月三圓五十錢にて生活する決心を
 なす。悅藏感激して米來留と同居を決心す。三月二十七日母りう悦藏米來留との同居を許す。三
 月三十一日米來留と共に上京四月九日まで第七回萬國學生基督教青年會に八幡基督教青年會を代表
 して出席内外諸名士を知る。四月二十五日浦谷貞吉青年會館の料理番となる。四月二十九日八幡町
 英語夜學校教師となる。九月十七日八幡教會新築獻堂式。悦藏説教臺を寄附す。十一月二十八日祖

父金介死す。十二月二十四日八幡基督教青年會を代表して長濱教會に出席。
十九歳、明治四十一年（二五六八）一月一日米來留に別れ兵庫の家に歸り三井物産株式會社兵庫支店
網濱倉庫穀肥部に勤務。

二十歳、明治四十二年（二五六九）一月二日八幡町に米來留を訪問。村田幸一郎・千貫久次郎等と共に撮影。十一月某日大橋五男に手紙を送り三井物産會社を辭し米來留と共に青年會の事業に盡力せんことを言ふ。十二月日不祥八幡町に來り再びメレルと同居。

二十一歳、明治四十三年（二五七〇）一月二十九日米來留の訪郷旅行を見送つて敦賀に行く。五月三十日徴兵検査の結果兵役免除となる。五月某日高畑爲次郎・浦谷貞吉・宮森武次郎等六人兵主村野田に行き野田傳道最初の集會をなす。六月廿四日より三日間高畑爲次郎・宮森武次郎と共に野田に講演會を開く。七月十四日より四日間野田に大橋五男・高畑爲次郎・宮森武次郎と共に傳道説教會を開く。九月十六日兵主神社の秋祭に大橋五男・武田猪平・宮森武次郎・金子卯吉と共に路傍説教會をなす。十二月米來留・チェーピン三人にて合名會社を設立す。

二十二歳、明治四十四年（二五七一）一月十七日野田傳道の結果二人の受洗者を得。六月母りう、八幡町に移住。

二十三歳、明治四十五年（二五七二）三月十五日母りう受洗。七月三日安土に基督教青年會開會式あ

り。米來留・村田幸一郎・武田猪平と共に出席す。七月十五日雜誌湖畔の聲第一號を米來留・武田猪平・村田幸一郎を同人として發行。九月三十日（大正元年）敦賀港より汽船ポルタワ號にて歐米第一回旅行の途に上る。十月二日浦塩港着。十一月五日ビイタアスブルグを離る。十二月下旬アマリカに入る。

二十四歳、大正二年（二五七三）一月紐育レキシントン街の聖書學校入學。八月ノウスフィールド基督教青年會の夏期學校に出席す。同月萬國基督教青年會旅行幹事を囑託せられ三十八大學を巡訪して日本人留學生の爲に盡力す。五月某日ベンシルベニア停車場に米來留を迎ふ。八月カンザスシティにて開催せる萬國學生義勇團四千人の大會に出席す。同月エステスバークの山莊にてエ・エム・ハイドよりメンソレータムの話聞く。十月米來留紐育にて盲腸炎手術、これを看護す。同病院外科主任リイ博士に刃渡り三尺一寸朱鞘鐵鐔の一刀を贈る。

二十五歳、大正三年（二五七四）三月十三日天洋丸にて横濱歸着。三月十四日八幡町に歸り池田町五丁目に新築の家に入る。七月末日神奈川縣大津浦基督教夏期學校に出席内村鑑三・日野眞澄・笹尾桑太郎・柏井園等の講義をきく。九月二十六日ガリラヤ丸進水式。

二十六歳、大正四年（二五七五）一月二日祖母吉田ひで死す、享年七十一。二月五日悅藏分家吉田の戸主となる。四月より通信傳道開始。

二十七歳、大正五年（二五七六）一月二十九日飛行家ナイルス八日市飛行場に來る。悦藏其の通譯を依頼せらる。二月よりガリラヤ丸にて湖畔巡廻傳道を始め。十月十五日渡邊きよの と結婚す。

二十八歳、大正六年（二五七七）一月より八日市飛行場在勤將校の依頼により英語教授をなす。毎月安土・大原・八日市・大津・水口・膳所・彦根・日野・野田・馬場・米原の十一箇所に出張傳道をなす。三月五日始めて鎌田漢三に會ふ。五月二十一日母りう 死す享年五十二。五月二十二日北の庄の休憩所に縊死人ありこれを葬る。五月二十七日兵庫教會にて母りう の記念會を營む。七月九日八幡教會にて母りう の永眠五十日の記念會を開く。十月四日長男希夫生る。

二十九歳、大正七年（二五七八）四月六日嘉永六年にベルリ提督の乗艦に短艇係として日本に來たといふハアデイ老人八幡町に來り二日間に宇津呂小學校・八幡小學校・共同座・長濱共濟會・米原小學校・彦根女學校等で講演其の通譯をなす。五月五日八幡町魚屋町に近江禁酒會事務所を設け會員募集をなす。五月二十一日賀川豊彦を招き母りう の一周年記念講演會を開く。五月二十五日近江療養院開院式を擧ぐ。十月十一日團員の精神的革命の必要ありとして近江基督教傳道團を解散、三日間休業して祈禱會をなし更に近江基督教慈善教化財團と改稱し再度の旗擧をなす。此の時五人退團、十一月十八日より十二月上旬までブツクマンの通譯をなし全國に活躍す。

三十歳、大正八年（二五七九）一月五日發行の湖畔の聲にて紀元は西曆を廢して皇紀を用ふべく本年

を紀元二千五百七十九年と呼ぶべしと唱道す。一月三十一日ヘブライ語學者渡邊善太を同志社大學に訪問す。三月九日安土教會設立に招待さる。四月四日京都東山病院にてヘルニヤ截開手術を受く。五月二十三日きよの 長女のぶ、次女たか を産む。六月三日メレル一柳満喜子と結婚式を擧げ其の附添人となる。

三十一歳、大正九年（二五八〇）十月五日東京にて世界日曜學校大會開催、準備委員・庶務係長・通譯を依頼せらる。十二月十五日近江セールズ株式會社設立、取締役となる。

三十二歳、大正十年（二五八一）六月四日近江療養院設立滿三年記念會を開く。十二月十七日米原紫苑會館開館式司會をなす。

三十三歳、大正十一年（二五八二）二月號湖はんのこゑに始めてメンソレータムの一頁廣告を掲ぐ。

二月十日 きよの サイベリヤ丸にて渡米。

三十四歳、大正十二年（二五八三）四月近江の兄弟ヴォーリス等を警醒社より發行。五月極東オリンピック大會が甲子園に開かれ其の大會委員となる。開會中フリッツピン大學總長オシマス博士及び名士ゴメス博士と、秩父宮殿下との御會話を通譯申し上げ。六月鮮滿支旅行。九月一日輕井澤にて激震にあふ。

三十五歳、大正十三年（二五八四）九月五日彦根高等商業學校講師となる。十二月十七日付にて彦根

高等商業學校長より職務勉勵に付金三十圓賞與。

三十六歳、大正十四年(二五八五)七月彦根高等商業學校講師を辭す。

三十七歳、大正十五年(二五八六)七月十八日東京春秋社より湖畔聖話發行。九月一日商業學校時代の先輩古長清丸を迎へ入る。十二月十五日近江の兄弟等増補出版。

三十八歳、昭和二年(二五八七)野田基督教青年會館落成一月九日獻堂式。湖畔の声七月號よりナザレのイエス一代記を掲げ初む。十二月十日・十一日浦上の天主堂にて羅馬法王廳使節ギアルディニに會ひ基督教徒聯盟設立の必要を説く。

三十九歳、昭和三年(二五八八)一月十六日滋賀縣立八幡商業學校講師を囑託せらる。七月二十日より二十五日まで御殿場東山莊基督教青年會夏期學校講師となる。十一月二十日東京春秋社よりナザレのイエス出版。

四十歳、昭和四年(二五八九)一月二十一日より三日間栗原陽太郎・杉山元治郎・升崎外彦を招き農村傳道講習會を開く。三月二十六日より四月十八日まで西村關一を校長として湖畔國民高等學校を開く。四月四日弟徳藏死す享年三十四。八月十九日坂本芙蓉園にて滋賀縣基督教役者修養會を開く。九月滿鮮旅行。

四十一歳、昭和五年(二五九零)二月一日米來留來日二十五年祝賀式を擧ぐ。二月十九日支那旅行の

途に上る。三月二十七日横濱出帆加奈陀・亞米利加への旅に上る。八月十九日坂本芙蓉園にて縣下役者修養會を開く。十一月三日水口教會獻堂式。

四十二歳、昭和六年(二五九一)一月七日より各所に於いてアメリカの機みと題する講演をなす。三月九日鮮滿支旅行の途に上る。五月東京にて十七新聞社廣告祭にアラビヤ人隊と駱駝七疋の假裝隊を編成して東京市中を練り歩かしめメンソレータムの廣告をなす。八月七日和歌山縣南部町に升崎外彦の事業を視る。八月二十六日より二日間京都市外清瀧榭屋にて縣内役者修養會を開く。七月メンソレータム宣傳用團扇七十五萬本を作る。十月十五日教育會館開館式をあぐ。十一月十五日彦根公會堂にて縣内信徒大會を開く。十月初旬メンソレータム日記帳十萬冊を賣る。

四十三歳、昭和七年(二五九二)一月十二日より野田に農民福音學校開校、校長西村關一。一月十五日より市邊村に滋賀國民高等學校を開く。一月十九日より湖畔國民高等學校を堅田に開く。二月二日神戸出帆龍田丸に乗船三度目の海外旅行の途に上る。二月十一日ハワイ上陸二月二十日ロスアンゼルス上陸。二月二十六日ウイチタの商業會議所にて日支問題の説明をなす。三月二十九日英國リバプール着。四月六日パリに着。四月九日ゼネバに着杉村陽太郎・原田健に會ふ。四月十一日ヴェニスに行き建築見學。四月十三日ロマ着。四月十五日ボンベイを見る。四月二十六日バレストアインに入りナザレに着く。四月二十日ガリラヤに行く。四月二十八日エルサレム着。四月二十九日ヨル

ダンに行く。五月二日カイロウに行く。五月五日ポウトセイドより白山丸乗船。五月十六日コロ
ボ上陸。五月二十一日シンガポール上陸。五月二十六日香港上陸。六月一日神戸着。七月一日きよ
の大阪醫大病院にて大手術を受く。八月以降淡路・東京・群馬・兵庫・八日市・能登川・野田・仁
保・木ノ本・大阪・京都・名古屋・別府などにて講演。八月二十三日二十四日兩日坂本芙蓉園の
教役者修養會にて社會民衆黨幹部片山哲の講演を聞く。十一月十三日八幡教會にて滋賀縣下基督
徒大會を開く會衆三百四十人。

四十四歳、昭和八年(二五九三)一月四日より四日間學生基督教青年會冬期學校開校。三月三日より
十日間近江農村青年學校開校。四月四日近江勤勞女學校開校式をあぐ。七月二十三日二十四日御殿
場東山莊基督教青年會夏期學校講師となる。八月六日發鮮滿支視察旅行をなす。九月十九日發仙臺
より樺太まで旅行。十月十五日よりマルコ傳執筆。

四十五歳、昭和九年(二五九四)二月二日近江基督教傳道團を近江兄弟社と改稱す。二月十九日より
二十八日まで第二回近江農村青年學校。五月十日今津基督教會館獻堂式。六月八幡町高等女學校敷
地及舊校舍買収を約し反對運動起る。八月近江兄弟社小學校・近江兄弟社食堂・近江兄弟社入浴
場・近江兄弟社消費組合・近江兄弟社炊飯配給所・近江兄弟社洗濯所・近江兄弟社農場・近江兄弟
社旅館・近江兄弟社圖書館等の設立を計畫す。八月二十日より二十二日まで坂本芙蓉園にて縣下教

役者修養會を開き熊野義孝を講師とす。十一月十一日爲心町の八幡基督教會最後の集會をなし、十
一月十八日より新築の教育會館にて朝夕の集會をなす。

四十六歳、昭和十年(二五九五)一月上京して主婦の友石川武美・ライオン齒磨の小林富次郎・キャ
ラメルの森永太郎・花王石鹼の長瀬富郎と共に基督教信者事業家の共同戦線を張ることを畫策
す。一月十日メンソレータム元祖ハイド死す。二月二日近江兄弟社設立三十周年記念。二月四日
より十日まで十一箇所にて長谷川尙を講師とする記念講演會を開く。二月十一日より第三回農村青
年學校開校。二月十三日きよのと共に臺灣旅行。四月五日希夫同志社大學豫科に入學。五月十六
日出發鮮滿支旅行。六月十五日八幡基督教青年會館再建獻堂式を擧げ希夫を司會者とす。七月一日
湖畔日月を發行す。八月六日横濱發清澄丸にて渡米世界基督教宣教大會に出席。十月八日ネワアグ
の大會場で理想的社會と題して演説す。十月十五日シラキユウス大學病院に入院盲腸炎の手術を受
く。十一月十五日のポストスタンダド紙は彼の入院を詳報す。十一月二十四日四十日目で退院。
十二月三十日死線を越えて無事歸國。

四十七歳、昭和十一年(二五九六)四月十六日播州大市に祖先の建てし専光寺を見る。四月二十一日
きよのと共に九州旅行。五月十五日東京階行社にて始めて中島今朝吾に會ふ。五月號湖畔の声誌
上にて餘命二十一年三箇月なりといふ。七月二十三日増井庄藏事件起る。八月十八日希夫フィリッ

ピン旅行より歸る。八月二十一日飛彈の高山に行く同行者希夫・のぶ・たか。九月十六日佐藤安太郎・諸川稔と共に伊勢・三河・伊豆・甲斐にボロ自動車旅行をなす。十月七日創の家買収。四十八歳、昭和十二年（二五九七）一月十三日同志社大學紛擾解決の爲東京に行き中島今朝吾に面會す。一月二十日第五回近江農村青年學校開校。二月二日より三月五日まで創の家にて毎日修養會を開く。五月二十四日きよの 同伴支那旅行。六月二十八日同志社大學理事となる。八月十三日午前八時皇大神宮に參拜祝詞を奏す。十一月糖尿症と診断せらる。此の一年間同志社問題に全力を注ぐ。四十九歳、昭和十三年（二五九八）一月二十八日山本一清の辭意強制表明事件について對策を講ず。二月二十七日同志社大學理事に再選さる。三月十九日近江兄弟社女學校第一回卒業式をあぐ。三月二十二日上京日疋信亮に會ふ。四月十九日牧野虎次を同志社大學總長に推薦す。五月十一日滿鮮支の旅に上る。十月十八日鮮滿支旅行の爲出發。

五十歳、昭和十四年（二五九九）一月十日マルコの傳へしイエス物語發行。二月十八日近江兄弟社創立三十四年祝賀。三月二十四日近江兄弟社女學校第二回卒業式。四月二十三日客員王國鈞誤つて琵琶湖に死す。五月七日滋賀縣下基督信徒大會を長濱豊公園にて開く。五月十二日王國鈞の遺骨を携へて支那に向ふ。湖畔の聲六月號に希夫王國鈞を悼む長詩一篇を掲ぐ。八月十七日より二日間坂本芙蓉園にて縣下教役者修養會を開く。九月三十日體量二十貫五百匁。十月十五日八幡教會朝の禮拜

は大阪放送局より全國に放送。十一月二日東京青山學院にて開ける全國信徒大會に出席（出席者八千人）十二月二十二日ガリラヤ丸を廢船となす。

五十一歳、昭和十五年（二五六〇）一月體量十八貫。一月八日咽喉痛む。一月二十一日より三日間メレル・満喜子・村田幸一郎と共に近江兄弟社前途の爲に祈り且講す。此の月まで近江兄弟社が近江の傳道事業及び醫療事業教育事業に捧げし金額一百八萬八千五百七十一圓三十九錢。三月十九日希夫同志社大學法學部政治科を卒業し法學士となる。たか、のぶ、共に同志社女子專門學校英文科卒業、たか、大學部に進む。三月二十三日近江兄弟社女學校第三回卒業式。四月八日出發支那旅行。五月十一日全日本私設社會事業聯盟より表彰さる。五月十三日十四日琵琶湖ホテルにて西村關一・村田幸一郎・佐藤安太郎・諸川稔・筒山米次と共に外地部準備委員會を開き鮮滿支に於ける事業計畫を相談す。五月十五日彦根工業學校にて朝香宮殿下の尊顔を拜す。五月十六日皇大神宮參拜。六月六日外務省に出頭メレル歸化問題相談。七月四日靜養の爲輕井澤青林山莊に行く。七月二十二日御殿場の東山莊に行き近江兄弟社より金五千圓寄附。體量十七貫五百。八月六日オックスフォードグループについてメレルと語る。八月二十日メレル八幡町八幡神社氏子となる立言式をなし神田三段歩を寄進す。八月二十三日輕井澤沓掛にて賀川豊彦と最後の會合をなす。九月二十日希夫・のぶ同道きよの 祖先代代の墓に參る。九月二十日近江兄弟社の新體制實行をなし理事長となる。此の

日より近江兄弟社關係の各傳道所を日本組合基督教會に移管す。十月十日東京に於ける全日本社會事業大會に出席。十月十二日新宿御苑拜觀。十月十三日同志社大學理事として高島屋に於ける新島襄展覽會に出席、東久邇宮殿下に賜調の榮に浴す。十月十七日青山學院校庭に於ける基督教徒の皇紀二千六百年の奉祝會に出席す會衆三萬。十月二十八日皇大神宮參拜、同行者十二人。十一月二十日富山縣雄山神社昇格祭に參拜。十一月三十日希夫伏見中部第四十三部隊に入隊。十二月十一日近江兄弟社圖書館開館式舉行。

五十二歳、昭和十六年（二五六一）一月一日七十歳まで生きる希望を手帳に書く。日不詳辭世の和歌を日記帳に書く。一月十八日上京。一月二十四日町役場に行きメレル一柳家入家の保證人となる。一月二十五日一柳米來留と共に滋賀縣廳に知事を訪ふ。二月一日近江兄弟社創立三十六年の祝賀會。三月二十一日近江兄弟社女學校第四回卒業式。四月七日近江療養院長栗本清次醫學博士となる。四月十二日滋賀縣圖書館協會會長囑託。四月十九日上京圖書館視察。四月二十七日滋賀縣下基督教徒大會を八幡教會にて開會。五月一日上京湯島聖堂を視る。五月十日日本圖書館協會滋賀縣支部長となる。五月二十五日希夫幹部候補生となる。五月二十八日北越旅行。七月一日希夫上等兵となる。七月一日輕井澤に行く。七月二日近江兄弟社女學校校長を辭す。八月十六日兩肺の後部に痛みを感ず。八月十九日村田幸一郎に伴はれて上京大塚病院にて診察を受く。八月二十一日栗本清次

日野原重明の診察を受く。九月四日輕井澤發八幡町に歸る。疲勞甚し。十月二十二日始めて人工氣胸術を受く。十月二十三日銀婚式を祝ひ得ず。十月二十五日希夫京都深草陸軍病院に入院。十一月六日湖畔の聲に病床漫筆を書きはじむ。十二月八日宣戰布告眞珠灣大戦果を知つて興奮甚し。十二月十八日悅藏の代理として栗本清次・西村關一宮内省に出頭御下賜金並に傳達書拜受。十二月二十日輿の後皇居遙拜、床上に袴を置き羽織を着して御下賜金及傳達書を拜す。皇恩骨身に徹す。

五十三歳、昭和十七年（二五六二）一月二十八日血液注射をなす。三月一日體量十五貫三百匁。二十四日面會許さる。三月十三日希夫の夢を見る。三月二十一日希夫歸宅。泣いて迎ふ。三月二十三日危篤に陥る。四月に入り病狀順調となる。湖畔の聲四月號に彼の筆になる病床漫筆を掲ぐ。四月二十一日病床漫筆第五回を希夫に代筆させ病氣の苦しさを心底から知つたといふ。五月一日吉田悅藏は復活せよ。と、いふ天の聲を聴く。五月十三日體量十四貫五百匁。五月十七日體量十四貫六百八十匁（百八十匁増）。五月二十四日體量十四貫五百八十匁（百匁減）。六月一日體量十四貫三百匁（二百八十匁減）。六月九日室内を自ら歩む。七月二十日臥床三百十九日目に入浴す。八月二十七日病床漫筆第九回を書く。九月三日體量十四貫九百匁（六百匁増）。九月六日近江療養院に行く。九月十七日從弟吉田壯藏中尉無言の凱旋。九月末日回生漫語を書き全快後は宗教傳道に全力をそそぎたいと言ふ。九月二十三日松山常次郎と共に近江療養院に行く。九月二十九日近江兄弟社圖書館まで歩む。

十月六日試に自轉車に乗る。十月十日社員二十名を招いて快復祝をなす。十月十九日近江兄弟社の運動會を見る、往は自動車歸は徒歩。十月二十八日以後體温を計らず。十一月號の湖畔の聲に回生漫語第二回を掲ぐ。十一月十日自らピアノを弾き讚美歌三百二十番を歌ふ。十一月十六日三日後に高松宮殿下台臨あらせられるにつき西村關一より其の言上書を聞きて泣く。十一月十七日朝入浴蒲團敷布を取り換へ衣服を改めて十八日を迎ふる準備をなす。十一月十八日高松宮宣仁親王殿下近江兄弟社へ台臨あらせらる。朝來身を清め皇居を遙拜して御成を待ち奉る。十一月十九日呼吸困難となる。十一月十九日注射七回。十一月二十一日午前二時五分靜に永眠、十一月二十二日近江兄弟社の社葬とす。

昭和十九年十一月二十日 印刷
昭和十九年十一月二十五日 發行

非賣品
限定出版五百組

編者 沖野岩三郎
 發行者 吉田悅藏記念出版委員會
代表 内 炭 政 三
 印刷者 神戸市舞合區吾妻通三丁目十七番地 佐藤爲吉
 印刷所 神戸市舞合區吾妻通三丁目十七番地 中外印刷株式會社
滋賀縣八幡町魚屋町元二九
 發行所 近江兄弟社

992
163

終